高島市 歴史散歩 No.17

近江聖人の教えを伝える史跡 ～藤樹書院～

安曇川町上小川に建つ藤樹書院は、江戸時代初期の陽明学者・中江藤樹が弟子や村人とともに学んだ勉学の場として、広くその名を知られています。

もともとこの場所には藤樹の屋敷があり、そこには藤樹の教えを求めて多くの弟子や村人が集っていました。しかし徐々にこの屋敷が手狭になってきたため、正保5年(1648)2月、藤樹が亡くなる約半年前に、弟子や村人たちの協力によって新しい講堂が完成しました。この当時の建物は、萱葺きの入母屋造りで、現在の書院よりも一回り大きいものであったと伝えられています。

この講堂は、藤樹の業績を伝え、その教えを広めるための建物として、村人の手によって維持管理されてきましたが、明治13年(1880)9月26日の小川村の大火によって焼失しました。ただ、この時、藤樹の遺品として伝えられる貴重な品々は、村人達の手によってほとんどが搬出され、焼失を逃れたといいます。

焼失から2年後の明治15年(1882)、少しでも早く藤樹書院を再建したいという村人達の尽力によって、新しい藤樹書院が完成しました。ただ、この建物は、焼失後の仮堂として建てられたため、創建時の建物とは規模も間取りも異なるものでした。このため、地元の人々の間では、早くから本来の藤樹書院を再建しようという計画が持ち上がりましたが、戦争や財政状況の変化などのため、それが実現化されることはありませんでした。

藤樹書院一帯は、大正11年(1922)には国の史跡に指定され、近江聖人・中江藤樹の教えを今に伝える貴重な史跡として、全国各地からこの地を訪れる人は、今も途絶えることがありません。

(文化財課)

●ご存知ありませんか?…

(財)藤樹書院では、今後の藤樹書院復原計画のため、明治時代の焼失前の藤樹書院にかかわる資料を探しています。昔の藤樹書院が分かる写真、図面、関係文書等の所在をご存知の方がおられましたら、良知館 ☎(32)4156までご連絡ください。

藤樹書院

編集後記

信号待ちで　ふと…
風にゆれる菜の花を見て
ゆっくり走りたくなりました。
(安曇川町青柳にて)

▼今年の春は本当によく雨が降りました。雨は気分を滅入らせますが、雨にまつわる天気用語の中には、情緒あふれる言葉がたくさんあります。この春先に降り続く雨は、ちょうど菜の花の咲くころにあたるため「菜種梅雨」とも呼ばれるそうで、昔から菜の花が生活に深い関わりのある植物であったことがうかがい知れます。菜の花は、やはり群れ咲く姿が一番似合いますね。今年も市内では、菜の花が風に黄色い頭を揺らしています。ひとつが動くと周りも連なってゆらりゆらと。強い風には支えあいながら。▼今月の表紙は、4月16日に行われた「くつき朝市 in さくら祭り」の様子をご紹介しています。「地域に根付いた　地域に愛されるクラブ」を目指して立ち上がった「OBC高島」の初めての地域イベントとして、選手たちがこの朝市に参加しました。慣れない手つきで餅をつく姿。さすがにバットを扱うようにはいきませんが一生懸命な選手たちの姿と、そこに集う人たちの笑顔がすごく印象的でした。地域に密着したクラブチームとしての第一歩を踏み出した「OBC高島」。彼らの夢は、地域が支える姿が一番似合います。

(広報担当O)

発行・編集　高島市役所企画部秘書広報課
〒520-1592　滋賀県高島市新旭町北畑565番地　☎0740-25-8130

R100 古紙パルプ配合率100%再生紙を使用
PRINTED WITH SOY INK™ 大豆油インクを使用しています。

高島市 歴史散歩 No.37

藤樹文庫の開設

明治時代は、5年（1872年）の学制発布、12年の教育令制定などに伴い、全国的にさまざまな手法で教育普及への取り組みがなされた時代でした。そのうちの一つが図書館（文庫）の開設です。ただ図書館という名称が初めて使われたのは日本初の国立図書館である東京図書館が開館した明治13年ですが、本を書架に並べて公開したり貸し出したりする図書館活動の始まりは、奈良時代ころであったことがわかっています。

明治時代に設置された図書館の形態は、国立・郡の教育会によるもの・私立など様々でしたが、いずれも独立の施設が造られることは少なく、公共施設や寺院の一角などに置かれることが多かったようです。開設のきっかけは、国家記念事業の一環などである場合が多く、具体的には、日露戦争の開戦、大正天皇の即位、天皇の行幸などのときに、それらを記念する文庫が設けられました。

高島市内では、明治38年（1905年）5月、郡によって「藤樹文庫規則」が制定され、9月に藤樹書院内に藤樹文庫（その後、藤樹図書館と改称）が設立されています。

中江藤樹の居宅および塾でもあった藤樹書院は、早くから文庫的性格をもっていたようで、同年10月25日付けの「高島郡報」によると、藤樹文庫の創設に伴い、これまで書院に伝わってきた多くの図書が藤樹文庫に引き継がれたとあります。ただ実際は、開設当初の蔵書数は文庫と呼ぶには不足気味で、大正時代の蔵書のほとんどは、文庫開設以降に当時の郡長や郡内の有志から寄付されたものであったといいます。

藤樹文庫の運営面での大きな特徴は、蔵書の一部を木箱に納め、その箱を郡内の各小学校へ順に巡回したり、人の多く集まる床屋などに設置したことです。現在の移動図書館の先駆けとも言えるこの活動は、大正3年（1914年）にはすでに行われていたことがわかっています。当時は県内でも異色の活動として知られ、「高島郡報」には小学校への貸出状況等が詳しく報告されています。

藤樹文庫の蔵書の一部は、中江藤樹記念館に引き継がれており、現在も来館者の皆さんに見ていただくことができます。

（文化財課）

▲藤樹図書館

編集後記

冬の使者が今年もやってきました。

（今津町北仰で）

▼冬の使者コハクチョウが今年もやってきました。毎年100羽前後が、高島市の湖岸でひと冬を過ごします。こんなに広い琵琶湖でも、コハクチョウが生息できる場所は限られているといいます。コハクチョウが飛来し、安心して越冬できる地であり続けたいですね。▼子どもから お年寄りまでが気軽に楽しめる雪あそびの道具として、スノーシューが人気を集めています。スノーシューとは、現代版の西洋式かんじきのことで、これを使って雪山に挑むスノーシュートレッキングのフィールドとして、高島トレイルが近年注目を浴びています。真っ白な雪で覆われる冬の高島トレイルの美しさは他の季節とは一味違う魅力があります。この魅力を、より多くの方が楽しめる体制もずいぶん整いました。冬の新しい楽しみ方として、一度、体験してみませんか？ ▼1月1日で高島市も満3歳になりました。今年は、藤樹先生生誕400年の記念すべき年です。皆さんのご参画をよろしくお願いします。

（広報担当○）

発行／高島市　編集／企画総務部広報課
〒520-1298 滋賀県高島市新旭町北畑515番地　☎0740(25)8130
http://www.city.takashima.shiga.jp
koho-info@city.takashima.shiga.jp

R100 古紙リサイクル率100%の用紙を使用。
PRINTED WITH SOY INK 大豆インクを使用しています。

広報たかしま
（平成20年7月1日）
第70号

高島市 歴史散歩 No.43

中江藤樹先生と大溝

江戸時代初期の陽明学者で近江聖人と親しまれる中江藤樹先生は、慶長13年（1608年）3月7日、近江国高島郡小川村（現在の高島市安曇川町上小川）に生まれました。当時、小川村は大溝藩が所有している土地でした。大溝藩は教育や学問への関心が深く、藩校脩身堂も近隣の諸藩にさきがけて開校されています。藤樹先生の「孝」の思想を基本にした「知行合一」と「致良知」の教えは、人々に大きな感化を与えました。

大溝藩二代藩主分部嘉治も藤樹先生の「感化（人徳をもって感化する）」を聞き、正保3年（1646年）に藤樹先生を招いています。寛保6年（1721年）には、五代藩主分部光忠が、藤樹書院の地子（税）を免除したうえ、祭祀料として補助も行いました。寛保18年8月2日には、書院に参拝もしています。さらに十一代藩主光貞は、藩の儒官川田甕江に命じて、「藤樹先生年譜」と「徳本堂記」を編集させ、河田興に依頼して「致良知」の三大文字のあとがきも作っています。このように、歴代大溝藩主は、藤樹書院の保護と維持に努め、藩士たちも藤樹先生を敬慕（尊敬して人柄を慕う）し、藤樹の教えを学ぶ者も多くいました。

時は流れ、昭和11年、大溝町の町立実科女学校は県立に移管され、県立藤樹実科高等女学校となります。初代校長には藤樹研究家の松本芳麟が任命され、中江藤樹の学風を基盤とする徳育重視の女学校として歩むことになります。それは、当時の校章や校歌からもうかがわれます。昭和18年、中江藤樹の十一代目に当たる中江勝が第二代校長になり、以後、敗戦後に新制高校に編成替えになるまで校長の職にあって、「致良知」の教えに立った教育を行いました。

今日に至っても、藤樹先生の教えは、地元青柳小学校において、しっかりと受け継がれ、また、地元住民の方々の熱意により、広がりを見せています。特に今年は、生誕400年の記念すべき年にあたり、高島市・高島市教育委員会・藤樹先生生誕400年祭実行委員会が記念事業を実施しているところです。「近江聖人・中江藤樹」の教えを再認識していただくよい機会となることでしょう。

（文化財課）

▲藤樹女学校

編集後記

きれいな花の陰らで、新しい命が宿っています。
（モリアオガエルの卵塊）

▼カキツバタに負けじと水辺に咲く白い花と思いきや、モリアオガエルの卵塊。大仕事を終えた親たちは、「コロコロ、コロロ、…」と大合唱。この時期、山間の池は、いつも以上に賑やかです。▼今月の表紙は、6月7日に行われた「グラウンド・ゴルフ家族ペア大会」の様子をご紹介しています。昭和57年に鳥取県の泊村で誕生したグラウンド・ゴルフ。瞬く間に全国に普及し、いまや愛好者数は全国で100万人とも。市内でも、盛んに行われるようになって約10年。愛好者も右肩上がり。打って、歩いて、時には走り、集中力と調整力が要求されるこのスポーツ。終えたときの適度な疲労感と心地よさは、盆踊りと同じく、見てるだけでは味わえません。

（広報担当ロ）

広報たかしま
（平成20年7月1日）
第70号
編集／高島市　編集／企画政策室広報係
〒520-1292 滋賀県高島市新旭町北畑5815番地　☎0740(25)8130
http://www.city.takashima.shiga.jp
t-info@city.takashima.shiga.jp

PRINTED WITH SOY INK
大豆インクを使用しています。

中江藤樹の息子 常省

毎年、7月23日に安曇川町上小川の藤樹書院では、「常省祭」が行なわれます。常省とは、中江藤樹の息子で、藤樹の死後はその学問を受け継いで中江家の跡取りとなった人物です。7月23日は常省の命日にあたることから、その遺徳をしのんで儒式での祭典が行なわれています。

生後50日で父と死別

常省は、慶安元年（1648年）7月4日（以下、日付は旧暦）に藤樹の三男として生まれました。名前は季重、通称を弥三郎といいました。母の布理は、大溝藩士・別所氏の娘で、藤樹に嫁いだ時、中江家には先妻・久子の子である7歳の長男・虎之助と3歳の次男・鍋之助がいましたが、その子どもたちの世話や家事をよくこなす女性であったと伝わっています。

藤樹は常省が生まれた年の8月25日に死去したため、常省は生後わずか50日で父親と死別することになりました。藤樹は臨終に際して、門人に幼い子どもたちのことを頼んでいたため、上の二人は小川村の村人に、1番幼い常省は、藤樹の高弟である熊沢蕃山の妹が嫁いでいた東万木（青柳）村の岡田家に引き取られることになりました。

常省の墓

岡山藩の学校奉行に

常省は万治元年（1658年）、11歳のとき、蕃山が仕える備前・岡山藩の池田光政に出仕することになりました。藤樹の学問を深く慕っていた池田光政には、先に二人の兄も召し抱えられていましたが、二人は体が弱く、若くして亡くなったため、寛文5年（1665年）には、常省が中江家の家督を継ぐことになりました。その2年後には、蕃山の弟である泉仲愛とともに岡山藩の学校奉行となっています。

延宝6年（1678年）、常省は岡山藩を辞して生地である近江国上小川村に帰郷し、その後京都に転居して、延宝8年（1680年）には、父・藤樹を尊敬していた対馬藩主に招かれて、対馬藩に仕えるようになりました。

京都で藤樹学を開講、江西常省先生と呼ばれる

貞享4年（1687年）、40歳の時に対馬藩を辞し、京都で藤樹学を講じたところ、門人が増加し、この頃から人々は常省を「江西常省先生」と呼ぶようになりました。

その後、対馬藩の江戸藩邸に召し出されて江戸で過ごした後、京都四条に隠棲しました。

宝永6年（1709年）5月、持病の悪化のため上小川村に帰郷し、1か月後の6月23日、62歳で死去しました。

常省の門人は、地元の上小川村周辺住人や大溝藩士などに多く、彼らは常省の死後も藤樹の教えを広めることに尽力したと言われています。常省の墓は、上小川の玉林寺門前に父や祖母と並んで建てられています。

問 文化財課 ☎（32）4467

編集雑感

6月中旬、たまたま高架下の道を通った時、川辺にチカチカと光る黄緑色の光を見つけました。思わず「蛍や！」と大声で叫び、聞かれていないか周りを確認。カメラが手元になく残念でしたが、夏を身近に感じられました。高島市は水と緑のまちですから、蛍の名所がたくさんあります。写真に収めるも良し、飽きるまで眺めるも良し。お住いの近くで蛍の光を探してみてはいかがでしょうか。（M）

広報たかしま 平成28年 7月号 No.198
発行▼高島市 編集▼政策部秘書広報課
〒520-1692 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740（25）8000㈹
http://www.city.takashima.lg.jp
t-info@city.takashima.lg.jp

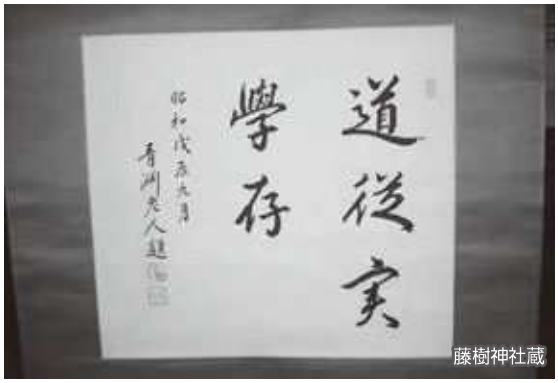
広報たかしま
令和2年 9月号 No.248

渋沢栄一と藤樹神社

2024年に刷新される紙幣のデザインに指定され、令和3年の大河ドラマの主人公としても注目されている渋沢栄一。「日本近代資本主義の父」と呼ばれた実業家と高島市の関係についてご紹介します。

渋沢栄一の生涯

天保11年（1840）、武蔵国血洗島村（現在の埼玉県深谷市）の豪農の長男として生まれ、幼い頃から『孝経』や『大学』、『中庸』、『論語』などを読んで学問に励みました。そうして培った教養を生かし、14歳の頃には難しい藍の買いつけを成功させるなど、農家としての経験を積んでいきました。のちに、京都御所の警護をしていた一橋慶喜（のちの15代将軍）に仕える武士となり、江戸幕府終焉後には明治政府の大蔵省で日本の財政の一端を担いました。明治6年（1873）に大蔵省を退所すると、日本初の銀行である第一国立銀行（現在のみずほ銀行）を創立し、他にも300社以上の企業設立に関与する実業家へと転身しました。



藤樹神社蔵
道従実学存（道は実学によって存す）

藤樹神社蔵
聖凡一性（聖人も凡夫も同一平等である）

論語と算盤の一致

渋沢栄一が一貫して主張した理念が「論語と算盤の一致」でした。これは、明治維新以降も世間に色濃く残っていた「士農工商」のような階級差別思想に対して、中国の思想家孔子の教えをまとめた『論語』のなかの「道徳心」と「経済活動（金儲け）」を一体化させ、蔑視されていた商業者の社会的地位の向上を目指すという考えです。そのためには、私利私欲のために働くのではなく、「公益」のために「実践」することを重要視しました。実際に、彼は本来利益を第一とする実業家でありながら、民間企業の創立・育成に加えて教育や社会福祉、民間外交の推進などの公益事業にも尽力しました。

藤樹神社の創立

実践を重んじる陽明学に共感していた渋沢栄一は大正10年（1921）に、現在の安曇川町上小川の藤樹神社創立に伴う「藤樹神社創立協賛会」の顧問に就任しました。その創立資金を募った際、自身は当時の総理大臣の月給に相当する1千円もの寄付を行い、さらに三井・岩崎・古河・住友・大倉・森村などの大手財閥にも寄付を呼びかけるなど、資金調達に大きく貢献しました。

藤樹神社鎮座祭

創立後、藤樹神社へ渋沢栄一直筆の墨書（写真左上）が奉納され、その言葉からは「実践」と「公益」を重んじた彼の生きざまが感じられます。

問 文化財課 ☎（25）8559

編集雑感

空を見上げると、真っ青な空にもくもくとした白い雲、それだけでも「夏」を感じることができますね。

しかし、今年は梅雨明けが例年より遅かったせいか、「夏」が短かった気がします。それでも季節は巡り、これから暑さもおさまり、過ごしやすい「秋」がやってきます。

こんな時だからこそ、遠くの観光地へ行くのではなく、一番身近な地域の魅力を再発見する「ローカルツーリズム」を楽しんでみませんか？（Y.O）

発行▼高島市　編集▼政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740（25）8000(代)
http://www.city.takashima.lg.jp
t-info@city.takashima.lg.jp

R70 古紙パルプ配合率70%再生紙を使用。

中江藤樹とその教えを受け継ぐ人々

―渋沢栄一・熊沢蕃山―

中江藤樹は、近江国高島郡小川村（現在の安曇川町上小川）で生まれ、日本陽明学の祖として知られています。藤樹が残した書跡等は、古くから地域の人々によって大切に守られてきましたが、大津市打出浜にある県立琵琶湖文化館（休館中）にも、藤樹に関連する資料が数多く収蔵されていることはあまり知られていません。

藤樹神社創立には、藤樹の思想に深く共感し、大河ドラマの主人公として注目を集めている渋沢栄一が大きく貢献しました（令和2年9月号歴史散歩参照）。琵琶湖文化館に収蔵されている当時の高島郡長・佐野真次郎の資料には、渋沢がかねてから藤樹を尊崇していたことが記されています。また、藤樹の門人の中でも熊沢蕃山は『大学或問（わくもん）』を著し、岡山藩における藩政改革の立役者となりました。その書跡が琵琶湖文化館に収蔵されています。

令和4年は、藤樹の私塾の跡地である藤樹書院跡が史跡指定100周年の記念の年になります。また今年は、琵琶湖文化館も開館から60周年という節目の年となることから、滋賀県との共催企画として展示会および講演会を開催します。展示会では渋沢栄一や熊沢蕃山を始めとする中江藤樹に影響を受けた人物に焦点を当て、中江藤樹とその教えを受け継ぐ人々についてご紹介します。また、令和2年度に修理が完了した2件の仏画や高島市ゆかりの文化財も併せて展示します。普段公開されていない資料ばかりですので、ぜひこの機会にご覧ください。

木造中江藤樹坐像
森大造 作
（琵琶湖文化館蔵）

問 文化財課 ☎（25）8559

琵琶湖文化館開館60周年・史跡藤樹書院跡指定100周年記念展「渋沢栄一と中江藤樹・熊沢蕃山―高島市ゆかりの文化財とともに―」

【会　期】 10月22日㊎～11月14日㊐
休館日：毎週月曜日、11月4日㊍

【第1会場】 高島市藤樹の里文化芸術会館　展示室1
開館時間　9時30分～16時30分
観覧料　無料

【第2会場】 近江聖人中江藤樹記念館
開館時間　9時～16時30分
観覧料　高校生以上300円
（20人以上の場合200円）
小・中学生無料

※20人以上でお越しの場合は事前連絡をお願いします。

関連講演会

【日　時】
11月6日㊏
13時30分～16時10分

【会　場】
高島市藤樹の里文化芸術会館ホール

【参加費】 200円

【定　員】 100人（事前予約制）

【講座内容】
① 「渋沢栄一と滋賀―その内面に与えた影響―」
講師：井上優　氏（滋賀県文化財保護課　主幹）
② 「高島市指定文化財の仏教美術」
講師：山下立　氏（滋賀県立安土城考古博物館　主任技師）
③ 「未来に守り伝える地域の宝」～高島市指定文化財の修理報告～
講師：坂田さとこ　氏（（株）坂田墨珠堂　代表取締役）

【申込方法】
近江聖人中江藤樹記念館へ電話またはFAXでお申し込みください。

★詳しくは文化財課窓口・中江藤樹記念館・高島歴史民俗資料館・各支所等に配置されているチラシをご覧ください。

問・申　中江藤樹記念館　☎（32）0330
FAX（32）0330

国史跡「藤樹書院跡」指定100年のあゆみ

藤樹書院跡（安曇川町上小川）は、日本陽明学の祖として知られる中江藤樹の居宅および私塾のあった地で、藤樹の遺徳を伝えるための拠点として、長い歴史のなかで周辺の住民などによって大切に守り伝えられています。藤樹書院跡は、大正11年（1922）3月8日に国史跡に指定されてから来年で100周年になります。

藤樹書院の創建と文化財指定

中江藤樹は、15歳のとき大洲藩（愛媛県大洲市）に仕えましたが、27歳で脱藩し故郷の小川村へ戻りました。はじめ自らの居宅で私塾を開き、のちにその南側に会所を建てましたが、門人が増えるにしたがって手狭になったことから、慶安元年（1648）2月に新しい講堂である「藤樹書院」が建築されたといわれています。藤樹が亡くなった後も村人や門人によって維持管理がなされ、藤樹の百回忌にあたる延享4年（1747）には正門が建てられるなど、藤樹の業績を伝える場として整備されました。

建物は、明治13年（1880）に起こった小川村の大火により焼失してしまいましたが、幸いにも書院内にあった宝物は村人によって持ち出され、その2年後に仮の講堂として再建されたのが現在の藤樹書院です。そして、大正11年（1922）再建された建物を含む跡地一帯が「藤樹書院跡」として国史跡に指定されました。さらに平成19年（2007）7月26日には、書院近くの玉林寺の門前にある中江藤樹墓所が国史跡に追加指定されています。

また、昭和54年（1979）、大火を免れた宝物のうち25点が「中江藤樹歴史資料」として旧安曇川町の指定文化財となり、翌年には藤樹の命日に行われる「儒式祭典」が町指定無形民俗文化財（現在は高島市指定文化財）に指定されています。

藤樹書院旧図

記念館での展示

近江聖人中江藤樹記念館では、藤樹書院跡が史跡指定100周年を迎えるにあたり、令和3年度展示として令和4年3月31日まで、藤樹書院の代表的な所蔵品を展示し、書院の成り立ちから現在に至る歴史や地域の人々とのつながりを紹介しています。展示の詳細については、30ページの文化情報ともしびをご覧ください。

問 中江藤樹記念館
☎（32）0330

藤樹書院跡正面

創立100年を迎えた藤樹神社
～創立に関わった偉人たち～

安曇川町上小川にたたずむ藤樹神社は、「日本陽明学の祖」と呼ばれる中江藤樹を祀った神社で、地元をはじめ、全国各地の方々から大変親しまれ、季節を問わず多くの参詣者が訪れます。

藤樹先生御絵伝

藤樹神社の創立

藤樹神社の創立は、第15代滋賀県知事の森正隆が発意し、第16代の堀田義次郎がその意志を受け継ぎ、大正8年(1919)に高島郡長であった佐野真次郎にその任を授けました。翌年、佐野を理事長とする「藤樹神社創立協賛会」が組織され、杉浦重剛や東郷平八郎、大隈重信などが名誉会員となって神社創立を推し進めました。

また、藤樹が説く陽明学に共感していた渋沢栄一は、協賛会の顧問に就任し、金1千円を神社創立資金として寄付をするとともに、三井、岩崎、古川、住友、大倉等の財閥にも寄付を呼びかけました。このように、藤樹神社は数々の偉人の尽力により創立が実現しました。

藤樹先生御画像

藤樹神社宝物展の開催

藤樹神社に隣接する近江聖人中江藤樹記念館では4月8日(金)から9月30日(金)の間、企画展示「藤樹神社宝物展」を開催しています。中江藤樹の真筆(しんぴつ)や肖像画をはじめ、東郷平八郎筆の御神号や、佐野真次郎が著した神社創立に至る記録「藤樹神社御造営謹記」など、藤樹神社に所蔵されている貴重な資料を中心に展示します。さらに、普段は非公開である「藤樹先生御絵伝」を9月16日(金)～30日(金)の期間限定で展示します。ぜひこの機会に近江聖人中江藤樹記念館へお越しください。

藤樹神社御造営謹記

問 近江聖人中江藤樹記念館
☎(32)0330

「庚申（こうしん）さん」への信仰

上小川の庚申塔

安曇川町上小川の藤樹神社の境内に、市の有形文化財に指定される石造庚申塔があります。船型の石板の表面には「見ざる　言わざる　聞かざる」の3猿が彫り出され、その様式等から江戸時代に造られたものと考えられています。

上小川の石造庚申塔

日本に広まった庚申信仰

庚申塔とは、中国から伝来した道教に由来する庚申信仰に基づいて建てられた石塔のことで、庚申塚とも呼ばれます。

庚申信仰では、60日ごとに巡ってくる庚申（かのえさる）の日の夜は、人の体内にいる「三尸（さんし）」という虫が、人が眠るのを待って、体内から抜け出して天に昇り、天帝にその人の罪を告げるので、告げられた人は早死にをすると考えられます。このため長生きをするためには、庚申の日の夜は、眠らないで身を慎むことが必要とされました。

日本では、平安時代に貴族の間でこの信仰が広まり、室町時代になると次第に一般の人々の間でも、庚申の日に仲間とともに徹夜で勤行をしたり飲食をしたりする庚申講の行事が行われるようになっていきました。なお、庚申塔は、その庚申講を3年18回続けて行った記念や供養のために建てられるもので、村の境界近くなどによく置かれました。

針江の庚申石塔

市内の庚申塔

道教の教えに由来する庚申信仰は、日本では仏教や神道にも関係する民間信仰として人々の間に広まったため、その信仰の対象は、仏教的な考えでは青面金剛（しょうめんこんごう）、神道的な考えでは猿田彦神であるとされました。このため、庚申塔の石形や彫られる仏像、神像、文字などはさまざまで、市内でも種類の違ういくつかの庚申塔が見られます。

新旭町針江の日吉神社の前には、自然石に「庚申」の文字が彫られた石塔が建っています。また、今津町保坂の旧街道沿いにも庚申塚と呼ばれる自然石が残っています。

庚申講の変化

『新旭町誌』（昭和60年刊行）には、庚申の日には庚申講の講員が集まって、酒、餅、小豆飯、精進料理などを「庚申さん」に供え、入浴して身を清めて勤行等を行い、その後は飲食と雑談で眠らずに時を過ごしたという風習が紹介されています。こうした庚申講の行事は、市内各地で行われていたと思われますが、近年はさまざまな事情で、行事が縮小されることが多いようです。

問 文化財課
☎（25）8559

中江藤樹と高島の学びの系譜

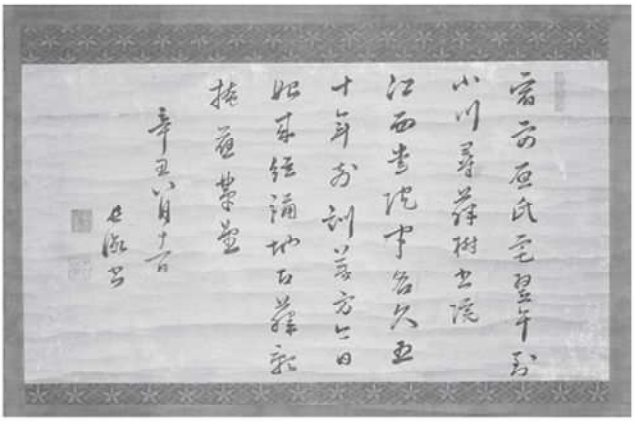
大溝藩校『脩身堂』への影響

近江国高島郡小川村（現在の高島市安曇川町上小川）に生まれ、「日本陽明学の祖」と呼ばれる近江聖人・中江藤樹（1608～1648）は、庶民と武士の別なく人々を教え、郷里の学びに大きな影響を与えました。

中でも高島郡大溝（現在の高島市勝野）に城下をおき、小川村も領地としていた大溝藩は、正保3年（1646）の藤樹と第二代藩主分部嘉治との接見を皮切りに、藤樹没後も歴代藩主が藤樹書院の保護・維持に努め、『藤樹先生年譜』、『徳本堂記』の編集などを進めました。

また、藩士の中には藤樹を敬い、藤樹の三男・常省に学ぶ者たちが存在し、彼らと全国各地から藤樹書院を訪れる著名な学者や文人たちとの交流は、大溝藩の教学に大きな影響を与えました。

大溝藩は小藩ではありましたが、教育への関心が高く、天明5年（1785）近江諸藩のなかで最も早く藩校『脩身堂』を設立しました。教学の中核を担った藩士らが、古義学派の著名な儒学者・伊藤東涯（1670～1736）に学んでいたことから、藤樹の学風は薄れたものの、藩内の藤樹を慕い仰ぐ念は益々強くなり、近江聖人として厚く敬う気風が定着していきました。



七言絶句　伊藤東涯 筆（藤樹書院蔵）

直垂　伝中江藤樹遺服（藤樹書院蔵）

記念館での展示

現在、近江聖人中江藤樹記念館では令和4年度後期企画展「中江藤樹と脩身堂－学びの系譜－」を3月31日（金）まで開催しています。中江藤樹が大溝藩主より下賜（かし）されたと伝わる直垂（ひたたれ）をはじめ、書院での藤樹研究の中心人物となった安原貞平や、伊藤東涯の書跡のほか、今回初公開となる『脩身堂』文芸奉行（教授）を務めた中村徳勝らを輩出した中村家に伝わる書物など、藤樹が大溝藩に与えた影響や、『脩身堂』開校にいたるまでの経緯を知るうえで貴重な資料を紹介します。ぜひこの機会に近江聖人中江藤樹記念館へお越しください。

問 近江聖人中江藤樹記念館
☎（32）0330